

奇跡の復活リサイタル

韓国が世界に誇るテノール歌手ペー・チェチョルさんが、
歌手の生命線である歌声を失くしてから5年。
日本の名医の執刀によって声が戻り、「ハイC」が蘇った。



ペーさんの病は韓国KBSテレビでも報道された。韓国のクリスチャンたちが反省しているという

に登場し、華々しく日本デビューを果たしたのだ。

韓国は、世界でも有数の「オペラ大国」の一つと言われている。キリスト教信者が多く、幼少から教会でその才能を見いだされ、欧米に留学する人が多い。ペーさんもその一人だ。

「冬のソナタ」がNHKのBS2で放映され、韓流ブームに火が付き始めた2003年、オペラ界にも韓流ブームの兆しが見えていた。テノール歌手のペー・チェチョルさん(40)がその年の9月、東京・渋谷のオーチャードホールで、難曲中の難曲とされるヴェルディのイタリアオペラ「イル・トロヴァトーレ」

ソウルの大学を卒業後、イタリアのヴェルディ音楽院を修了。欧州各地の音楽コンクールで優勝した。世界でも貴重な「リリコ・スピント」(劇的な歌唱に適する強靱な声)の持ち主だ。韓国が世界に誇るオペラ歌手としてさらなる期待が寄せられていたペーさんだったが、05年

秋、ドイツの歌劇場で公演中、倒れた。甲状腺がんだった。

「もう歌えない」と宣告

がんは甲状腺の内臓を通る声帯や横隔膜などを動かす神経にまで及んでいた。その摘出手術によって、右の声帯と横隔膜が動かなくなった。執刀医には、「もう以前のように歌えないだろう」と宣告された。キリスト教信仰があつたペーさんは、こう悟った。

「オペラで名声を得るために、知らず知らずのうちに神様以外のものを第一にしていた。神様はそのことを悟らせるために、私のとても大切なものを取り去ったのです」

もう一度、神様のために心をこめて歌いたい……。そう強く願ったとき、「甲状軟骨形成術」という手術によって、声を取り戻せることを知った。

ペーさんの日本公演を手がけてきた音楽プロデューサーの輪嶋東太郎さんに相談すると、その手術ができる世界有数の医師が、京都大学名誉教授の「色信彦」さんであることがわかった。日本のファンからのカンパもあり、06年4月、京都で一色医師による4時間にわたる手術を受けた。その様子は、NHKのドキュメンタリー番組でも放送され、大きな反響を呼んだ。

「私の声は生まれ変わった。それには二つの意味がある。まず、新しい声によって私の人生が変わるとのこと。もう一つは、ほかの人に役立つための声にならなくてはいけないということ」

08年12月、東京・渋谷の白寿ホールで復活を果たした。思うような声ではなかったが、その

後、リサイタルを重ねるたびに声量が増し、かつてののびやかな歌声に近づきつつある。その後の訓練によって、テノール歌手にとって超絶技巧を必要とする高音「ハイC」も出るようになった。

越えられぬ川を越えた

「最初は望むような音が出ないことで、心苦しかった。でも、練習をやめなかった。音の世界を研究していくと、少しずつ力のある音が出るようになった。ああ、続けて練習すれば、最善を尽くせば、歌える。越えられぬ川をやつと越えたという不思議なうれしさがあります」

昨年、オペラ歌手としてヨーロッパで羽ばたき、声を失ってから復活するまでを自伝「奇跡の歌 声を失った天才テノール歌手の復活」(いのちのことば社フォレストブックス)にまとめた。いまは韓国で未来のペー・チェチョルを育てながら、6月の日本でのリサイタルに向けて訓練が続いている。

「歌をやめるときは死ぬとき」

ペーさんは生まれ変わった声で、そう覚悟を語った。

編者 大波 綾